

# 南方（ビルマ）

## ビルマ戦線

### 従軍の思い出

大阪府 二場 義照

私は昭和十九年三月教育召集を受け、朝鮮の第四十九師団第百六連隊へ編入され、九月にはビルマに入り、ビルマ派遣軍の行方「断作戦」に参加し、昭和二十年一月一日から「盤作戦」に参加した。我が部隊は、日本軍の撤退収容が任務であった。弾を撃つのは「白兵戦の時だけ」と命ぜられた。食糧は無く、また寝る時間がないので困った。歩兵の壕は五〇センチぐらいしか掘れない。戦車はもうそこまで来ているとい

うのが当時の状況だった。

私は昭和二十年三月二十三日の戦闘で、頭部を手榴弾の破片で負傷した。戦車はすぐそこまで来ているが、我が軍が作った壕に落ちて、壕内のチーク材が燃えている。負傷した兵が「水をくれ」と叫んでいる。

我が通信隊も大部分が戦死しているようだった。私はその時頭部を手榴弾の破片で負傷していたのだが、前線には一人の衛生兵もおらず、包帯包のガーゼを傷口に当て、三角巾で鉢巻きをしているだけで、前額部は腫れあがっていた。

日がたつにつれ傷はだんだん化膿し、頭部から顔全体が紫色に腫れあがり、人間の形相ではなかったと思う。しかし前線では治療の施しようがなく、中隊長の命令を受け、第四十九師団第四野戦病院に下がった。

入院治療中、どこかで見かけたような兵隊が、右腕を三角巾で首から吊るし、小銃を肩に掛けてふらふらとこちらへ来る。よく見ると同じ連隊の歩兵で、親戚の二場一二三（一等兵）であった。

彼は昨日の戦闘で右手貫通銃創を負い、昨夜後送されたというので、重傷であったがお互いの無事を喜び合った。彼の語るところでは、一月五日から悪戦苦闘の連続でまるで生き地獄のような毎日で、中隊約百三十人が自分を入れて二十数人になってしまい、生きているのが不思議だと、戦友の壮烈な最後を悼み涙を流していた。

翌日正午頃病院長から通達があり、「現在前線では敵戦車の攻撃を受け激戦中であり、第四野戦病院も敵軍の砲撃射程内に入り、これも安全でなくなった。重傷者は今夜軍用車両で後送するが、車両の数が足りないのので、歩ける兵は直ちにトングーの兵站病院へ転進せよ」との命令を受け、若干の食料を受け、数人一組になってトングーに向かって転進した。

主幹道路を南進すればトングーに着く。およそ五十里ぐらいと聞いた。しかし、昼間は主幹道路は歩けない。上空の敵機が絶えず旋回している。道路の左右の森林地帯で休息をとり、夜明けから午前八時半ぐらいまで歩き、夕方五時頃から日暮れまで歩く。途中、部落や川があれば水を補給して飯を炊く。食事は一日二回、腹は減るが充分に食べることは出来ない。トングーまで食糧を食いつながなければならぬからである。病院を出発してから六日目ぐらいに転進中の他部隊の兵隊とも合流し、総員三十数人になった。

今日は頭部の傷がズキズキと痛む。幸いにも菊部隊（第十八師団）の軍医殿がおられ治療していただく。他にも七人の負傷者がいて全員応急手当をしていただく。「あと二日ぐらいでトングーへ着くから皆頑張れ」との励ましの言葉を頂き、皆ありがたく、地獄で仏の声であった。

夜九時頃であったか、小川の水を腹いっぱい飲んで、水筒で湯を沸かしていたところ、「敵襲、敵襲」の叫び声で「全員戦闘配置につけ」の号令、素早く焚

火に土をかけ射撃態勢に入る。あたりは静まり重苦しい数分が過ぎ、前方から、合言葉の「山、山、山」とかすかに声がある。こちらから「川、川、川」と応答する。数分過ぎるとまた「山、山、山」と声がする。

「川、川、川」と答えると、「日本軍か」と問う声、

「そうだ日本軍だ」と答えると「狼だ、狼だ」と言いながら九人の兵が近付いて来た。危うく同士討ちをするところだった。彼等は野戦病院を私より遅れて出発した負傷兵であった。

合流すると同時に「水はありませんか、今朝から一滴の水も飲んでいない、今夜は水を探しに来たところ灯が見えたので声をかけた」という。友軍に逢えて本当に嬉しいと大喜び、早速小川に連れて行き兵隊達が満足するまで水を飲ませ、飯を炊かせることができた。

「軍医殿が明朝早く傷の手当てをするから、今夜は負傷兵は安心して眠れ、警戒兵は別に出てもらう」と、ありがたい言葉であった。翌朝、昨夜合流した負傷兵の応急手当てが済んだあと六時半出発。三十分ぐ

らい歩いた頃、友軍の軍用車が五台、猛スピードで北上するのに出会った。前線では、弾薬、食糧、医薬品、その他の物資が欠乏している。一日千秋の思いで待っている。無事到着を神仏に祈るのみ。

四月中旬頃だと思ふ。朝九時頃やっとトングー到着。お互いの武運を祈りあい、軍医殿をはじめ兵隊達は目的地へ転進して行き、私も第三百三十三兵站病院に到着。入院約十日で頭の傷も癒え、原隊復帰も間もないと思っていたころ、速射砲隊に編入の命を受けた。

翌日夜七時頃軍用車輛で前線に向かうところだったが、運良く夜八時半頃狼第一八七〇二部隊（歩兵第六連隊）通信中隊が主幹道路を転進して来るので原隊に復帰せよとの命を受け、九時頃原隊に合流出来た。

翌日夜が明け生存者の顔を見ると、前線で行動を共にしていた戦友は、分隊長の馬場軍曹、山城上等兵と私の三人だけ、あとは輸送分隊の首藤軍曹・三浦・安部・上原・柴田各上等兵、馬場・福田一等兵他に有線小隊の兵が数人の十数人のみ、陸軍士官学校出身の若

い鈴木中隊長以下全員戦死または負傷後送という悲惨な状態であった。

それにしても、我が第一八七〇二部隊は運がよく、ビルマ方面軍最後の予備隊であった。同じ第一八七〇三部隊（歩兵第百五十三連隊）と第一八七〇四部隊（歩兵第百六十八連隊）は、ビルマ到着と同時に北ビルマの最前線へ出動し、敵の大機甲部隊と、連日連夜激闘死闘を繰り返して、両部隊とも全滅状態になったと聞いた。

連合軍の戦法は、圧倒的な兵力・物量をもって、朝は戦闘機をもって銃・爆撃の繰り返し、敵機が去ると地上砲の猛砲撃が続く。その間に数十台の戦車を盾として、戦車に歩兵十数人が随伴し、我が軍の陣地を包囲攻撃してくる。決して戦車だけでは突入して来ない。日本軍の爆薬を抱いた肉弾攻撃を恐れ、歩戦共同作戦である。戦車砲と機関銃、歩兵は自動小銃を乱射しながらじりじりと肉薄して来る。

我が軍には弾薬が乏しいから無駄弾は撃てないの  
で、敵の接近を待って、歩兵を狙撃したり、戦車への

肉弾での爆雷攻撃である。このようにして敵を撃退する。もし戦車軍団に突入されたなら、陣地は蹂躪され部隊は甚大な損害を被る。昼間の戦闘で我が軍陣地は蜂の巣のようになり、止むなく夜半に陣地を撤退し後方の森林地帯に移動し、各隊ごとに陣地を構築する。しかし、陣地とは名のみで立木や雑木の茂みを利用して、身体を隠す小さな壕を掘るだけである。夜明けまでに掘らなければならぬが、土が硬くて思うように掘れず、気ばかり焦る中に迫撃砲弾が撃ち込まれる。

このような撤退を続けるが、我々通信隊は電線を担ぎ、無線機を持ち、空腹と疲労のため身体はふらふらとなり、自力で立ち上がることも出来ない状態になる。こんな時、早く戦死した方が楽になるなと思った。無線は敵に傍受されあまり使えなくなり、我々は連絡兵として連隊本部と行動を共にしつつの戦闘に参加していたのである。

話は前に戻るが、私が原隊に復帰した時は部隊も全滅状態で、他の部隊と交替したためか、再び戦車と交

戦はしなかった。転進に転進を続ける途中の五月中旬頃、この地点から西へ二里ぐらいの所の部落にゲリラが数人潜んでいて、撤退中の負傷兵が襲撃されたとの通報があり、直ちに討伐隊が編成された。二十数人、軽機関銃二、擲弾筒一、あとは小銃隊であった。現地は十五、六軒ぐらいの部落で、威嚇射撃をしたが、逃げ遅れた老婆と子供十人ぐらいで、要領を得ず引き揚げた。ゲリラは日本軍がラングーンで教育していたビルマ義勇軍の兵士で、五月の初旬、日本軍の劣勢を知り連合軍に寝返った一味ではないかと思われた。

ゲリラも気になるが、我が隊は一日も早く後方のタトンに集結し再編成の任務がある。止むなくこの地を出発、数日過ぎ、どのような命令があったのか初年兵の私に知るよしもなく本隊を離れ別行動になる。馬場軍曹・山城・三浦・安部・上原上等兵と馬場一等兵と私の七人であった。別行動中気の毒にも馬場一等兵の左足のリンパ腺が紫色に腫れあがり歩行困難になる。

装具は我々が分担、本人は竹を切り杖にして歩く。翌日河幅一〇〇メートルぐらいの大きな河に突き当た

る。河に沿って南下すると砂糖黍畑があり、河の堤防上に三坪ぐらいの小さな小屋があった。中に入っているとバナナかごが五かごあり、黒砂糖の塊がいっぱい入っていた。誠にありがたく早速頂くことにする。黒砂糖なんて何年ぶりか、だが食ってばかりはいられない。素早く水浴、洗濯を済ませる。髪、髭は伸びほろ、目は奥に落ち込んで衣服は垢と埃でどろどろ、しらみがうじゃうじゃ、おまけに衣服の縫い目に卵をビッシリ産みつけている。全く人間の着られるものではない。

野戦に従軍した者は皆経験済みと思うが、何カ月ぶりの水浴、洗濯を済ませ小屋で休息していると、対岸から軽機と小銃の一斉射撃を受ける。幸いにして砂糖が入っていたかごが盾になり全員無事、直ちに小屋を出て砂糖黍畑に駆け込み河伝いに南下、難を逃れることが出来た。

数日後本隊に合流、馬場一等兵は野戦病院に送られる。それから転進、転進を重ね、六月末ごろ集結地の

タトンに到着した。七月五日、第四十九師団通信隊に  
転属の命令を受ける。首藤軍曹・山城・三浦・安部・  
柴田・上原上等兵・福田一等兵と私の以上八人が同日  
バブン警備隊へ派遣命令、翌六日首藤軍曹以下八人が  
バブンに向かつて出発した。この時期のビルマは雨期  
の真つ最中で雨中を六日ほど歩く。

途中小さな森林があり民家も五軒ほどあった。横を  
幅六〇メートルぐらいの河が流れ、連日の雨で増水し  
流れが速い。ここには十人ぐらいの船舶兵が駐屯して  
いて転進して来る兵士を対岸へ渡していた。船は十  
五、六人乗れるのが二隻、木の枝や草をかぶせ擬装し  
てあった。「雨も小降りになった明朝は水量も引き、  
渡り易くなるだろうから、今夜はここに泊まって行く  
が良い」と、付近でとれた山菜を少し分けてくれた。

タトンを出発してから連日の雨で、飯を炊くことが  
できず、乾パンと食べられそうな野草を食べて来た。  
今夜は飯が食べられる、本当にありがたいことだ。

翌朝、船舶兵に対岸に渡らせてもらう。河から三〇  
メートルぐらいの路上に人が一人倒れていた。近付

いてみると、私と同年齢ぐらいの若い兵隊が、ここま  
で撤退して来たが命運尽き、数時間前に絶命されたら  
しい。顔面には既に蟻が数匹ついていたが、苦しみの  
様子はなく安らかな死に顔であった。兵士の遺体の処  
置を船舶兵に頼んだ。

我々は先を急がねばならない、連日の雨で予定より  
も一日遅れている。幸いにも雨が上がり歩き易くな  
る。急行軍を重ね、七月十四日昼頃バブン警備隊に到  
着、申告を済ませて宿舎に入る。宿舎は三十坪ほどの  
広さで煉瓦造り、屋根はトタン葺きの家であった。他  
にも一個分隊の警備兵との同宿で任務は毎日隊長の宿  
舎へ行き、朝八時から一時間、夕は五時から一時間各  
部隊との情報連絡にあたった(首藤軍曹外二人)。他  
の五人は食糧の確保に務める。

それから二週間ほど平穏な日が過ぎ七月末日頃、朝  
早く警備隊からの連絡で宿舎から北へ約二里ぐらいの  
所に大きな沼があり、その付近に野生の水牛が数頭生  
息しているとのこと。食糧補給のため射殺に行く。通  
信隊は一緒に行こうと誘われ、マラリア発熱の二人を

残し、私達三人同行する。警備兵の一人がこれから先は自分が一人で行く、水牛に気付かれ逃げられては困る。一発で射殺するから見ていてくれと言いながら沼の近くへ移動する。

水浴をやめた水牛が一行になつて陸地へ上がつて来た。射手は水牛の正面に回り込み一発発射、水牛は驚き横つ飛びに走り、一〇メートルぐらいで一頭が倒れたが、四股をばたばた、すかさず射手が近付き更に一発頭部に撃ち込みとどめを刺す。軍隊とは便利に出来ている。色々な職業の人の集合で直ちに二人の兵が現地の山刀で皮・骨・肉と切り離す。警備隊二個小隊と通信隊で約九十人、肉塊を八等分に分け、どれでも良いから持ち帰れと、誠にありがたく感謝あるのみであった。

早速野生のバナナの葉を切り取り、蔓で巻き木の枝にくくりつけ担いで帰る。途中他の分隊の兵に会い、「通信隊は早く帰れ、宿舎が敵機の機銃掃射を受け、一人戦死、一人重傷」の通報を受ける。急ぎ帰隊するが誰もいない。天井のトタン屋根に十数個所機銃弾で

穴があき、我々の寝起きしていた所は銃撃の跡で蜂の巣のようになつていた。

しばらくして首藤軍曹が来られ、「十一時四十分ごろ敵機二機に銃撃され、残念ながら柴田上等兵は大腿部貫通銃創で戦死、遺体は手首を切断して埋葬、手首は火葬する。福田一等兵は右足首貫通銃創を負い、衛生兵が応急処置を済ませ野戦病院へ後送した」との説明があり、この宿舎は再び攻撃される可能性あるので、一〇〇メートル離れた空き家に移動した。マラリア熱で残っていたために戦没された柴田上等兵の霊に合掌、冥福を祈りつつの移動であった。

持ち帰った水牛の肉塊は塩づけにして天日に干し保存する。米と肉はあれども野菜はなし。パイアの木の芯、バナナの木の根、また野草で食べられるものは何でも食べた。それから二週間ぐらい経過したある日の昼食中、無線で情報を聴いていた首藤軍曹の様相が変わり、しくしく泣きだし「残念」の一声。

突然のことでは何のことやら判らず、我々はただ呆然としてると首藤軍曹は、大粒の涙を流しながら「日

本は戦争に負けた、連合軍に降伏した。日本軍將兵は動揺せず次の指令を待て」との放送であったと言われた。首藤軍曹は直ちに警備隊長へ報告に行く。

翌日は敵機が低空で旋回しながらピラを散布して行く。拾って内容を読むと「かしこくも今上陛下におかせられては、我が連合軍の無条件降伏文を受諾され、戦争は終結した。日本軍の指揮官は白旗をかかげ軍使を八月〇日〇時にバブン県〇〇アイル道標上に派遣されたし」と書いてあったと記憶する。

人間の運命ははかなく、戦争が二週間早く終結していれば、柴田上等兵の戦死もなかったと悔やまれる。また、我々はこの先どうなるのか、運命を天に任ず以外に道はなかった。

この日から数日後、タトンの師団通信隊から「戦争は終結した。直ちに帰還せよ」との命令を受け、先に来た道をタトンに向け急行する。途中、過日お世話になった船舶兵にお礼を告げ、お互いの無事を祈りこの地を出発した。

タトンへあと二日ぐらいの地点で右編上靴の底糸が切れバックリと口を開け、歩行困難になる。初めは蔓でぐるぐる巻いて歩いたが、五分も歩くと切れる。何回か繰り返したが、だんだん分隊に遅れる。止むを得ず靴を脱ぎ裸足で走って追いつく。

時間が経過するうちに足の裏がむくみ、土の熱さと激痛で歩ける状態ではなく、困っているところへ幸いにも横の細い道から空の牛車一台道路に入ってきたので、現地人に足を見せ、言葉は通じないが、身振り手振りで、タトンまで乗せてくれるように頼む。牛車もタトンへ帰る途中なので心良く乗せてくれる。地獄に仏とはこのことかと思った。他の兵も疲労が激しく交替で乗せてもらい、数時間が過ぎやるとタトンに到着、通信隊近くまで送ってくれたので、肉の塩漬けを若干渡すと彼も大変喜んで帰っていった。

直ちに隊長に本部復帰の申告を済ませ宿舎に入る。数日後、三八式騎兵銃の菊の御紋を金槌で叩き潰し、所定の場所に持参し武装解除。この時なぜか連合軍の立ち会いはなく、日本兵が丸腰で立ち会っていた。九

月中旬のある日、「今朝は九時に朝礼がある。宿舎前に集合」の通達があり、師団通信隊全員集合整理。現時点での生存者は宮武少佐以下軍曹二人・伍長二人・兵三十二人で総員三十七人と記憶する。

隊長の訓辞内容は、「連合軍司令官の命により、我が通信隊は十月一日パブンに向かって出発する。到着後は道路工事の使役に従事する。くれぐれも健康に留意するように」ということだった。私は訓辞を聞いているうちに目の前が突然暗くなり、全身の力が抜けるにやぐにやと倒れてしまった。横にいた戦友二人が私を抱きかかえ宿舎に連れ込み衛生兵を呼んできた。身体がぞくぞく寒気がする。がたがた震えてどうにもならない。衛生兵は私の様子を見て「これはマラリアだ、すぐ発熱するが、心配することはない」と、注射をうち、連合軍のキニーネを一週間分くれた。この薬がよく効き、五日ぐらいで平熱に戻り食事も食べられるようになり、体力も回復しパブン出発に間に合う。通信隊は三個分隊に編成され、パブン到着後直ちに宿舎造りに取りかかる。宿舎とは名のみ、竹の柱に竹

の屋根、上に携帯天幕を張り、上間には枯れ草を敷きつめ、携帯天幕を敷く、雨露を凌ぐ簡素な小屋であった。日曜と雨の日を除き病人と炊事兵を残して、毎日使役に行く。作業は山肌を二メートルぐらい削り取り、道路を広くする作業であった。この時期のビルマは日中の気温は三七、八度に上昇し大変暑く、連日の作業は身体にこたえる。食事は一日に二食、十一時頃炊事兵が作業現場へ運んでくる。雑炊を飯盒半分ぐらいで朝・昼食を、夕食は飯か粥で日によって異なる。副食は主に乾燥野菜の少し入った味噌汁か塩汁ぐらい。野生のパバイアの木の芯、バナナの木の根等、食える物は何でも食い空腹を補う。

昭和二十一年一月に入って食事の内容が少し良くなる。また、十二月下旬から三月下旬ぐらいまでは日中の気温は三〇度を超し、夜半になると気温はぐんぐん下がり、夏の衣服では寒くて眠れない。交替で不寝番を立て焚火を焚き暖をとる。抑留の身とはいえ悲惨な日々の連続であった。苦しい中での救いは、連合軍の

監視兵がいなかったことで、週に一度地区司令官が第一分隊西村一等兵（通訳）をつれて点呼に来るだけである。終戦後一年近くの間、武士の情けか、日本将兵の心情をおもんばかってか、連合軍は一度も監視に来なかった。道路工事が完成したのは昭和二十一年四月の中旬であった。

その後、どこへ行くのか我々初年兵は知るよしもないが、我が通信隊も移動を始め、十日ぐらい経過したある日、私は二度目のマラリア病に襲われた。四十度を超す高熱が数日間続き身体が衰弱が激しく、移動中では処置なしであると衛生兵から隊長に報告され、第四十九師団第四野戦病院に送られ、重傷病棟に収容され手厚い介抱を受けることができた。

病棟長の曹長が私を見に来られ「二場さん」と呼んでくれた。これには私も驚いた。軍隊では一日でも早く入隊すれば古兵であり、上級者である。上下の差は絶対である。まして上官ともなれば命令に対して絶対服従である。一般社会での年長者、上司であっても軍隊では通用しない。

曹長が一等兵を「さん」付けて呼ぶのに驚いていると、曹長は「驚くことはない、戦争は終わったから上官も部下もない。今ここで死んでは犬死になる。一日も早く元気になり生きて日本に帰るのだ」と励まされ、死を覚悟していた私であったが、その言葉で生きる気力が湧いてきた。

思えばあの激戦の中を不思議にも命を永らえてきて、今ここで弱気になれば曹長の言われる通り犬死になる。なんとしても生きねばならぬ、病は気からという諺もあるが、全くその通りであった。その日から二十日ほど過ぎ、病状も次第に良くなり軽病棟に移る。軽病棟は一室四畳ぐらいの広さでアンペラで仕切っており、私は衛生兵に六号室に連れていかれた。この部屋には一八七〇四部隊の軍曹が一人入室していた。病院の規則とその他を親切に教えてくれた。

ある日、私が医務室から部屋に戻ると軍曹は「二場おめでとう、お前は今日六月一日付で上等兵に進級した」と言って階級章を出してくれ、「針と糸は持っているか」と聞かれ、「持っていないせん」と答えると

「俺が付け替えてやろう」と付け替えてくれ、私は感激のあまり涙が頬をつたった。

昭和十九年三月十一日入隊以来、曹長殿や軍曹殿のように優しく親切にされたのは初めてであり、この時人間の温情を肌にした。それから数日後、六月十日頃と記憶するが、病氣も回復し曹長殿、軍曹殿に礼を述べ本隊に帰隊することができた。

その頃のビルマは雨期に入り、毎日雨が降りうとうとらしい日が続いた。そんなある日突然、日本に帰る日が近いとの噂が流れ出した。半信半疑でいたが、数日後、全員身体につけている物を煮沸消毒せよとの通達があった。ドラム缶に熱湯を沸かし一人ずつ全裸になり衣服を放り込み五分間ぐらいで引き上げるのだが、雨が降って屋外に干せないから、宿舎内に拡げて干す。衛生隊の応援を受け頭を刈り髭や体毛を剃り、クレンジング液を入れたドラム缶に五分間入る。てんやわんやの大騒ぎであった。

六月二十九日、サルイン河の河港に復員船が入港、

六月三十日乗船、夢にまで見た祖国日本への帰路に就く。我々は愛する家族を守るため従軍したが、圧倒的な連合軍の軍事力に対して肉弾戦闘を繰り返して、マリアやアミーバ赤痢等の疫病に冒されながら命運つき、壮烈な最期を遂げたのである。いずれにしても数百万人に達する日本軍将兵の貴い犠牲の基に今日の日本の平和の礎が出来上がったのである。

私は武運に恵まれ九死に一生を得て生還出来たが、遠い異国の地で祖国日本の繁栄と愛する家族の幸福を願い、無念にも壮烈な最期を遂げられた戦友の姿が忘れられない。心から御霊に哀悼の意を表します。

### ビルマ、ミートキーナの戦闘

#### ― 帰って来た英霊 ―

長崎県 濱崎 英治

五十余年も前のことで記憶も薄れておりますが、大東亜戦争の終末、日本では無条件降伏ということを終